

卒業研究作成の試み

—「子ども家庭支援の心理学」の講義・演習を通して—

藤井裕子

FUJII Hiroko

本稿の目的は、学生に学びの集大成として「卒業研究」を課題として実施し、その学びの過程と学習効果について検証し報告することである。保育職をめざす学生が中心となる本学の場合、保育や幼児教育に関する専門的な知識の習得、保育専門職として就職する際の実践力を身につけておくことは大きな目的となる。同時にさまざまな問題に対処していく時に必要な論理的で客観的な視点を養い問題解決能力を向上させることは、就労してからの多様な問題に対応する力につながる。時間をかけて1つの論題を調査し掘り下げ深め、卒業研究としてまとめることで学生の主体的な学習成果がもたらされ、問題解決力の向上に反映されるのではないかと。近年、アクティブ・ラーニングによる指導の取り組みは注目されているが、卒業研究は自らの主体的な学習として位置付けられアクティブ・ラーニングとして意義が深い。学生は各自の卒業研究に取り組む過程を通して主体的かつ積極的に学び、就労してからも学び続ける姿勢を意識し始めたのではないかと考え実践報告を行う。保育士養成過程における学習の質を高めるためにアクティブ・ラーニングの方法を検討することは今後さらに必要とされる。

キーワード：卒業研究、アクティブ・ラーニング、論理的思考

1. 問題と目的

卒業論文は最終学年に1年間をかけてテーマを定め研究を行い、その成果を発表するものである。単なるレポートとは異なり、自らの問題意識から問いを立てて、それに対する文献を収集し、調査等を行って進めていくものである。多くの4年制の大学で課せられているが、修業年限の短い短期大学では課せられていないことも多い。特に本学のように保育職という資格取得を目的の一つとする短期大学では、基本的な知識や技能の習得および複数回の実習が課せられ、多くの学生は忙しい学生生活を送ることになる。この上に、卒業論文を課することは過度の負担も生じさせる。

しかし半年程度の期間をかけて1つのテーマを掘り下げ調査し考察することで問題を深めることが出来、それを文章化することで論理的思考も養われ、学生に達成感

をもたられるのではないかと考えた。きっかけとなったのは複数の学生からの次のような問題提起であった。

「教育実習、保育実習もすべて終了し、保育や幼児教育に関する知識や技術は習得したように思う。最終学年の後期にはどのような学びの目標を持てばよいか」という内容であった。筆者は学生が主体的に学ぶことがさらに必要であり、特に最終学年で本学での学びを集大成するようなまとめとしての学習が必要であろうと考えた。問題に取り組む深め、それを形にすることで学生に達成感も得られるだろう。卒業研究を目標として取り組めば、自らの学びが集約され就労してからも継続的な学びにつながるのではないかと考えた。

学校教育法において学力の3要素として、「基礎的な知識および技能」「これらを活用して問題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力」「主体的に学習に取り組む態度、学習意欲」が重視されており、その一つの方法としてアクティブ・ラーニングによる学習活動は文部科

学省も推進しているところである。卒業研究でこれまで培った知識や学力を活用して自らの問題意識を深めるために最適な方法と思われた。

もちろん、これまでから学生の主体的な学習を深めるためにグループワークなども取り入れ、テーマを決めて発表する指導は行っていた。この中でチームの役割分担に責任をもって取り組むなどに一定の教育成果をもたらすことができた。しかし学生の取り組んだ内容を形にして残せなかったのが心残りであった。

この反省から卒業研究を作成することで学びの集大成として可視化でき、各自が身につけた専門性がより明確になると考えた。筆者の担当する「子ども家庭支援の心理学」は子どもの精神的発達を基盤に親子関係の構築、家族の精神保健の知識、個別の配慮の必要な家庭についての理解が必要であり、保育の集大成として総合的な内容を含んでいる。児童福祉法にも定められている保育者の役割についても総合的に盛り込まれている科目であり多面的で幅広い視点が必要とされる。総合的なまとめとして取り組むに適している科目である。また学生自らの問題意識にも結び付きやすくアクティブ・ラーニングを促進するのにも適していると思われた。

卒業研究を作成する中で、文献や資料の検索、PCを活用して論文を作成することでITへの抵抗感をなくし使いこなせるようになること、またその過程をふりかえることによって自らの学びを総合的に点検すること等を目的とし、新たな教育のあり方を考察したいと考える。短期大学での学びをどのように深め集大成したかを明らかにすると同時に学生にとって文字数の多い論文を作成することで就労からの学びの継続にもつなげられることを目的とした。なおアクティブラーニングの表記について文部科学省の表記と同じく、アクティブ・ラーニングとする。

2. 方法

(1) 対象学生

対象となる学生は以下の通りであり、合計117名である。

表1 対象学生

2 回生(2 年制コース)	D クラス、35 名
3 回生(長期履修コース)	A クラス 28 名、B クラス 28 名、C クラス 26 名、合計 82 名

(2) 実施期間

2021 年 10 月～2022 年 2 月

(3) 実施内容

「子ども家庭支援の心理学」の授業のテーマ、到達目標、概要は以下の通りであり、後期授業の開始時に確認する。

表2 授業のテーマ・概要・到達目標

<p>【授業のテーマ】 現代の家庭の現状をふまえて子どもや家族の心理を学び家庭支援の方法を考察する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習の視点から乳幼児期から高齢期までの心理的発達と発達課題を理解する。 ・現在社会の現状と家庭の現状を学び家族への適切な支援に結び付ける。 ・子育て家庭の多様なニーズを把握し、関係機関との連携や協働について理解する ・子育て上に起こる諸問題を理解し解決策を図り、家族の精神保健の向上に努める。 <p>【授業の概要】 子どもの健やかな成長を支えるために子ども・子育て家庭への支援は重要である。時代の変遷を鑑み多面的に理解し子育て家庭を支援する。個別の支援を必要とする家族の背景と支援の実際の内容について学ぶ。</p>

卒業研究作成のスケジュールについて以下のように計画する。

表3 卒業研究タイムスケジュール

10 月	本科目について基本的知識の習得
11 月～12 月	研究論題の選択、資料や文献の収集、調査、原稿執筆
12 月末	原稿提出、発表
1 月	修正、まとめ、振り返りシート作成
2 月	合評会、省察

研究論題は以下の 10 項目から各自の興味関心に基づいて選ぶ。1 つの論題に人数が偏る場合は調整する。

表4 選択する論題

1, 家族の意義、機能、家族関係への理解、社会的状況との関連
2, ひとり親家庭の子どもと家族
3, 障害を持つ子どもを育てる家庭や家族
4, 虐待が疑われる家庭
5, 医療的ケアが必要な子どもの家庭や家族
6, 保護者に病気や障害が見られる家庭や家族

- 7, 予期しない出来事に遭遇した場合
- 8, 心の問題が見られる場合
- 9, 多様な家族 (外国につながりがある、ステップファミリー、養子や里親)
- 10, その他 (上記に該当しない内容)

卒業研究の文体、まとめ方は以下の通りとした。

表5 書き方

A4横書き、10枚以上、10000字以上
 図表の掲載も可能、
 Microsoft Word で作成、
 見出し:ゴシック体 10.5P
 本文:明朝体 10.5P
 文体:「・・・である」とする。
 序論・本論・結論・考察・参考引用文献が必要

文字数を10000字以上とするため通常のレポートより字数の多さに負担を感じる学生が予想される。

卒業研究の作成後に学習成果の確認を検討するために各自、無記名で「振り返りシート」の質問に答え感想や意見を記入する。「振り返りシート」はB.S.Bloomの学習目標の3領域、「知識・技術の習得」「意欲・関心の深まり」「資料の収集」を参考にして筆者が質問項目を作成した。

【振り返りシート】

卒業研究を作成して感じた意見や考え、感想を書いてください。

- 1, 卒業研究に取り組む中で、子どもや家庭支援について知識や理解が深まりましたか。

該当するところに○をつけてください。

知識や理解がとも深まった	知識や理解が深くなった	知識や理解は少し深くなった	知識や理解はあまり変わらない	知識や理解は深まらなかった
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- 2, 卒業研究に取り組む中で、子どもや家庭支援について関心や意欲が高まりましたか。

該当するところに○をつけてください。

関心や意欲がとも高くなった	関心や意欲が高くなった	関心や意欲が少し高くなった	関心や意欲はあまり変わらない	関心や意欲は高まらなかった
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- 3, 卒業研究に取り組む中で、どのようなことが出来るよ

うになりましたか。複数回答が可能です。該当するものすべてに○をつけてください。

スマホやPCの対応に慣れた	インターネットで調べられるようになった
レポートの書き方を習得することができた	自分のペースで取り組むことができた
文字数の多いレポートが書けるようになった	このような授業の進め方は苦手である
参考資料を調べたり利用したり出来るようになった	このような授業の進め方も時々あればよい
問題が自分の中で明確になった	就職してから役に立つと思う

自由に感想、意見、考え、疑問などお書きください。

3. 結果

(1) 論題の選定

卒業研究は全員に必修であるが、2021年12月末の期限までに取り組み仕上げ、発表した学生は107名(91.5%)であった。残りの10名は期限までに提出できず、現在も作成中である。

論題の選定は当初はレポートの枚数と文字数の多さから戸惑い、不満を述べる学生が多くみられた。しかし調べたり書き始めたりすると多くの学生が自分の課題に集中していく様子が見られた。論題の選定について、半数近くが「虐待の問題」に取り組み、次いで「障がい児を育てる家庭」「ひとり親家庭」と続いた。「心の問題を持つ家族への理解と支援」「多様な家族」を選んだ学生も少数ながら見られ、各自の問題意識や経験に基づいて記述した。論題を提出した学生は108名でその内訳人数は以下のとおりである。

表6 研究論題の内訳

論題	人数(名)	比率(%)
1.家族関係全般	0	0
2、ひとり親家庭	17	15.7
3、障害のある家庭	18	16.7
4、虐待問題	50	46.3
5、医療的ケア	5	4.6
6、保護者の疾患	0	0
7、予期しないこと	0	0
8、心の問題	7	6.5

9、多様な家族	7	6.5
10、そのほか	4	3.7

「虐待の問題」を論題に選択した学生が多かったのは、この問題について他科目でも取り上げており、学生の関心も高いことによる。しかし視点の向け方はそれぞれに異なり、「虐待の生じやすい連鎖」「虐待を受けた後のPTGについて」「虐待件数」「コロナ禍における虐待の増加」「ネグレクトの実態」など異なった視点から論じていた。資料やデータを調べる中で件数や数値の違いに気づき、複数の資料を照合させる必要性にも気づいていった。

「ひとり親家庭」を選んだ学生も多かったが、母子家庭だけでなく「父子家庭で特徴的な問題や支援の不足」「ひとり親家庭への法的整備」「情報の届きにくさ」など各自の視点から論じていた。

「障害のある子どもを育てる家庭」を選んだ学生には兄弟や親族に障害を持つ子どもがいて身近なテーマであった場合もあった。多様な障害について改めて学び、配慮すべきことも対象者によって違いのあることが論述されていた。

「医療的ケア児」や「心の問題の見える家庭」を選んだ学生は医療的視点から調べたが、専門用語が多く言葉の定義や言葉の意味するところを理解するのに苦労していた。就労先に障害のある子どもの療育に進む学生もおり、意欲的な学習態度が見られた。

「多様な家族」について、複数のステップファミリーへの面接を通して論術した学生は、知人を通して当事者と出会い質問項目に細心の注意を払いながら、当事者の協力も得て半構造的面接を実施した学生もいた。「多様な家族」を取り上げた中に「里親制度と実態」や「外国籍」の家族について詳しく調べた学生もいた。

そのほかの論題を選んだ学生は「LGBTの実態と理解」「インクルーシブ保育の考えに基づく公園の国際比較」「ヤングケアラーについて」「子ども食堂から見る家族問題への理解」であり、それぞれ文献や写真、映像資料も活用して記載した。

卒業研究作成を通して資料やデータの収集により、問題が今まで以上にはっきりしたことや、今まで知らなかったことが広がった、自分の関心事が展開した、などの感想は発表時に多く聞かれた。

(2)振り返りシートの結果

卒業研究作成を通した振り返りシートへの記載は 95名の学生から回収し、その結果の表とグラフは以下の通りである。

表7 卒業研究を通して得た知識や理解の深まり

	とても深まった	深まった	少し深まった	あまり深まらなかった	深まらなかった
人数(比率)	33	31	30	1	0

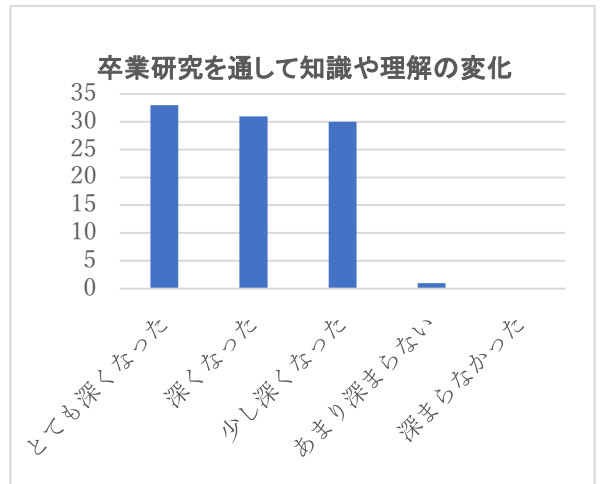


図1 卒業研究を通して得た知識や理解の深まり

表8 卒業研究を通して得た関心や意欲の高まり

	とても高くなった	高くなった	少し高くなった	あまり高くなかった	高くなかった
人数(比率)	29	36	24	5	1

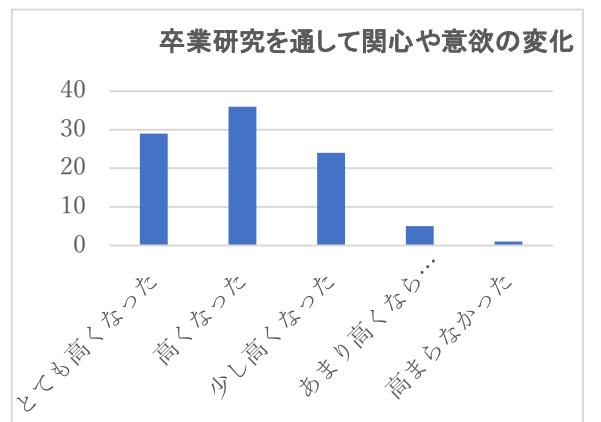


図2 卒業研究を通して得た関心や意欲の高まり

表9 卒業研究を通して自己評価や意見

項目	スマホやPCの活用	レポートの書き方	文字数の多いレポート	資料の収集	問題の明確化
人数(比率%)	56 (59.5)	49 (52)	29 (30.9)	51 (54.3)	23 (24.5)
項目	インターネットの活用	自分のペースで取り組む	卒研への苦手感	卒研も時々取り組みたい	就職してから役に立つ
人数(比率%)	44 (46.8)	65 (69.1)	19 (20.2)	27 (28.7)	44 (46.8)

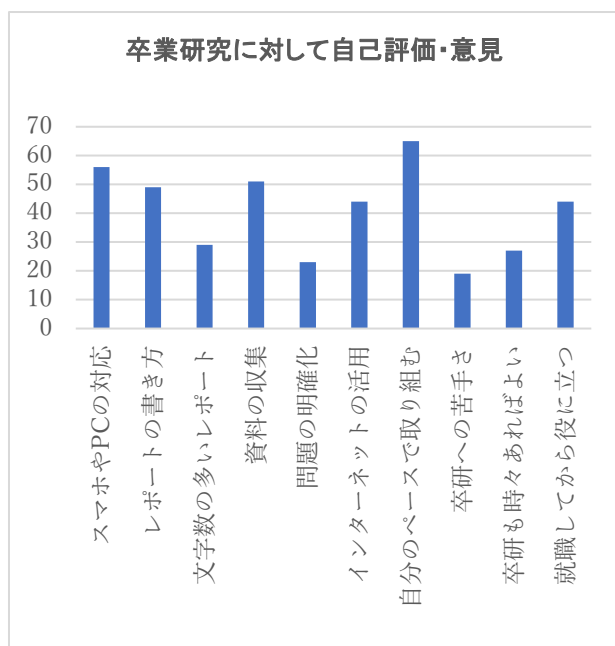


図3 卒業研究を通して自己評価や意見

「振り返りシート」の結果から問1の「卒業研究を通して知識や理解の深まり」については、「とても深まった」「深くなった」「少し深くなった」と答えた学生が、全体の98%を占め、ほとんどの学生に学習効果が見られたといえよう。自分の関心のある内容を調べることから始めているので知識も身につけやすい。問題を深めるために情報収集も積極的に行い、授業では学んでいない事象について詳しく学んでいく学生も多く見られた。

問2の「関心や意欲の高まり」については、「とても高くなった」「高くなった」「少し高くなった」と答えた学生が89名(93%)で、問1より少し少ない人数であるが、やはりほとんどの学生が関心や意欲が高くなり、一定の学習効果が得られたといえる。もともと卒業研究に積極的でなかった学生には意欲も育ちにくかったかと思われるので、動機づけをはっきりさせていく必要がある。

問3の卒業研究を通して得られたことでは、「自分のペースで取り組めた」と70%の学生が答えており個人差の見られる中で一斉授業ではなく、個々の学習の進捗状況に応じて進めることのメリットがうかがえた。意欲の高い学生は自分のペースで文献や参考資料を収集し読み込んでいくが、意欲の低い学生が取り残されるという結果にもなりやすく、アクティブ・ラーニングのメリット、デメリットを把握しておかなければならない。

問3の中で参考資料の収集として「スマホやPCの活用」「インターネットの活用」「資料の収集」にいずれも50%に近い学生が上達し、検索方法を学んだといえる。卒業研究の初めの時点で、PCの扱い方が分からず苦手意識の強い学生も散見されたが、慣れていくと新聞記事や報道、各組織のホームページも検索できるようになり、幅広く資料を集められるようになっていった。この経験は就職してから調べたり書類を作成したりする際に役に立つと思われる。もちろん図書館で書籍を検索する学生や他の授業のテキストを持参し調べる学生も多く見られた。

当初、心配した文字数の多さについて30%の学生が「文字数の多いレポートが書けるようになった」と自分の学習成果を確認しており、「卒業研究にも時々取り組みたい」にも約30%近い学生が肯定的に答えていた。なかには20枚以上、20000字になる論文を提出した学生もあり、短期大学においても習得した知識や技能を活用して、それを基に自分の考えを論述していくといった学習にさらに積極的、体系的に取り組んでいくことが必要ではないか、卒業研究は学生の達成感につながり積極的に取り入れることができるのではないかと考えさせられた。問3の質問で「就職してから役に立つ」と答えた学生も50%近く見られ、保育専門職として将来の成長に役に立つことも明らかになった。

(3) 自由記述の内容

自由記述を書いた学生は26名であり、その内容は以下の通りである。

(文字数について)

1つの課題に対して10000字も書いたことがないので難しかった。10000字は厳しい。文字数が多すぎる。文字数が多くてしんどい。10000字は大変だ。

(時間不足)

卒業研究に取り組む期間が短かすぎる。4年生の大学のようではないので、卒研をするなら今後対策を考えた方がよい。もう少し時間があつたら、もっと丁寧に仕上げられたと思う。時間が足りなかった。

(習得したこと)

レポートを書きながら学べた。障害について理解や支援の仕方がとても深まった。思ったよりも自由に書けた。自分の興味のあるものを調べることができた。自分自身の問題に触れることができたので、より理解を深めるきっかけになった。子どもの問題、保護者の問題を深く知ることができた。この研究を通して知っていることをもっと増やそう、と思うようになりました。ひとり親の心情、支援を知ることができた。文章の書き方を学べた。様々な本を読んで、自分の学びにつながった。パソコンの理解度が深まった。文字数の多いレポートが書けるように成長できた。新たな知識が増えた。普段調べないことえお調べたので、自分の知識になった。

(就労してから)

将来経営したい、と思っている「子ども食堂」について調べたので新たな知識が身についた。貧困問題について就職してから役に立つ。保護者の心情を知ることが出来たので、保育園でも活かしていきたいです。子どもの問題や保護者の問題が分かったので就職してから役に立つ。これから文章を書くことに慣れた。

(難しかったこと)

自分なりに考えることや考察が難しかった。大変苦手でしたが勉強になりました。しんどいけどがんばります。卒業研究をするなら、もっと環境を整えてほしい。しんどかったけど、まだまだがんばれそうです。

(その他)

先生の話を含めながら卒論を進めることができました。先生の教え方がわかりやすい。

自由記述で意見を記入した学生は26名で多くはなかったが、率直な感想が述べられている。字数の多さの負担感や取り組む期間の短さは発表時にも多くの学生が指摘した。卒業研究に取り組むには、学年当初から準備し、心構えをつけることが必要と感じられた。また他の教科とも関連付けて体系的に取り組むことも必要であった。自由記述では、難しかったが学習の成果が現れ達成感が得られていった、ということに肯定的な意見が多く見られた。一部に、IT環境として十分でなかったことや、4年制大学と時間的な余裕の違いの指摘、などもっともな意見も見られた。論文作成に際してIT環境を整えることは学務部職員の協力も得てできるだけ努めたが、PCに不慣れな一部の学生もおり、図やグラフの作成に時間がかかり困難が生じることもあった。卒業研究作成は高い目標であり、長期的に計画をたてて学生に意識づけしていくことが重要であるとする。

4. 考察と今後の課題

現代の短期大学には、「専門職業人の養成」「地域コミュニティの基盤となる人材の養成」「教養的素養を有する人材の養成」等にその教育的機能が求められている(文部科学省、2017)。特に実践的な職業教育への期待も大きく、質の高い職業人を養成することは社会からの期待もあり急務な課題である。そのための教育的効果を促す方法として、アクティブ・ラーニングの意義も指摘されている。知識や技術を習得するのみならず、それらを使いこなし自らの問題意識と結び付け継続的な学習へと展開していくことにアクティブ・ラーニングによる学習は効果が高い。

アクティブ・ラーニングは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称(中教審答申用語集、平成24年)」と定義されるが、学生の知識や技術の定着を促すためには欠かせないものである。一方、アクティブ・ラーニングにより一定の学習成果をもたらすためには、基本的な知識を習得していることが必要条件であり、それを基に主体的な問題意識があることなども必要である。ただ単にアクティブ・ラーニングを導入すれば学習成果が得られるのではなく、導入する際には前提として学生がどの程度、理解できているのか個々人の状況を把握しておかなければならない。

今回、卒業研究の作成という目標に向けて指導した際もこれまでの授業態度からほとんどの学生の学習状況について把握していたので、学びのゴールとしての目標もたてやすかった。さまざまな問題も生じるだろうが、知識を活用、応用し、自らの課題に積極的に取り組むことが各自の就労後も見据えた取り組みとして共有することができたと思う。卒業

研究の作成を通してこれまで学んだ内容を可視化し、問題解決を図り、振り返りを通してさらにスキルアップすることを目指したが、自ら問いを立て、解決に向かう力を養うことは専門職としての保育職には必要であることの自覚と理解を促すことに効果的であった。結果からも明らかのように、ほとんどの学生が知識や理解が高まり、関心が広がったことに自らの学習効果を認めている。10000字という今までに取り組んだことのない長さのレポートにハードルは高いが、資料を調べるなどをして作成することができていた。しかし全体に見てみると、資料収集や知識として得た情報を述べることはできたが、考察の部分を論述することに十分でない学生も見られた。

ジェネリックスキルを測定する PROG テストによれば「知識を活用して問題を解決するリテラシー」と「経験を積むことで身についた行動特性であるコンピテンシー」に分類されている(アクティブラーニング実践プロジェクト、2015)。問題解決力としてあげられているリテラシーの内、情報収集力、課題発見力などは育成されたと思われるが、情報分析力や構想力は不十分であったのではないかと考えられる。これらは一朝一夕に身につくものではなく、蓄積した知識や技術を俯瞰し、学んだ知識を関連付け自分の考えを深める積み重ねが必要であろう。指導を行う側も保育職として必要な知識や基本的なリテラシーを指導することのみならず、情報分析力も向上させるような取り組みにも注力しなくてはならないのではないかと。卒業研究作成の中から今後の課題として、浮かび上がったものを教育活動の中に体系的に位置付け醸成していく必要性について改めて考えさせられた。今後もアクティブ・ラーニングを活用した授業を工夫し、学生の学修成果が高まるように講義・演習に取り組んでいきたい。

6. 引用文献・参考文献

- 文部科学省高等教育局「平成27年度 短期大学教育に関する文教施策の現状について」2015
- 内閣府「幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領」チャイルド本社、2017
- 阿部和子「家庭支援論」萌文書林、2015
- 沼山博ほか編著「子どもとかかわる人のための心理学」萌文書林、2020
- 青木紀久代編「子ども家庭支援の心理学」みらい、2019
- B.S.Bloom、梶田叡一訳「ブルーム理論に学ぶ」明治図書出版、1986
- 永田恭介・山崎光悦編著「教学マネジメントと内部質保証の実質化」JUA選書第16巻、東信堂、2021

日本私立短期大学協会「私立短大教務担当者研修会」資料集 2015

藤井裕子「保育者を目指す学生に必要なとされる学びと課題—保育実習評価の分析から—」、京都華頂大学現代家政学研究、第3号、2014

小林昭文、鈴木達哉、鈴木映司「アクティブラーニング実践」産業能率大学出版部、2015

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は、学生の学びの集大成として、既存の知識や経験を学生自身が可視化するために、10項目の論題を提示し、自らの興味関心に基づく卒業研究の取組みへと導いた実践報告であり、能動的学習による学生の意識変容の過程を振り返りシートから分析、考察されている。学生の主体的な学びは、問題点や課題意識を深め、情報収集を積極的に行い自身の関心事をより展開していくこととなる。また、それらの経験は、就労後の専門知識の探求や様々な問題解決能力につながることを改めて認識することができた。(担当：川谷和子)

資料 卒業研究論題

	2D クラス	3A クラス	3B クラス	3C クラス
1	子ども家庭支援の心理学—里親問題について—	心の問題が見られる精神障害への支援	障害を持つ子どもと障害を持つ子どもの親が生き生きとした生活が送れるようになるために	SDGsの貧困に対する目標から貧困を考え、海外や日本での取り組みについて
2	多様な家族への理解と支援—ステップファミリーについて	障害児への理解を深め、保育へと繋げる	法律可決から半年『医療的ケア児』の現状と課題	発達障害の子どもを持つ親について
3	虐待が疑われる家庭への理解と支援—虐待が起こる背景とその心理—	障害のある子どもへの理解を深める	温かさという治療法—医療的ケア児の子どもたちと家族への支援	ひとり親家庭の現状と課題
4	ひとり親家庭の子ども、家庭への理解と支援	虐待が疑われる家庭への理解と支援	ひとり親家庭の子ども、家庭への理解と支援について	児童虐待について
5	幼少期からの共生社会の形成—インクルーシブ公園の国際比較	虐待の現実と家庭への支援	虐待が疑われる家庭への理解と支援	多様な家庭への理解と支援
6	ひとり親家庭の現状と支援	子どもの障害について	虐待が疑われる家庭への理	虐待が疑われる家庭への理解と支

			解と支援	援
7	ひとり親家庭の実像と支援について	いろいろな障害について	障害を持つ子どもを育てる家庭への理解と援助	障害を持つ子どもを育てる家庭への理解と援助
8	心の問題が見られる家庭への理解と援助	虐待が疑われる家庭への理解と支援	児童虐待の現状と課題	虐待が起こる原因とそれに対する考え
9	虐待の影響と対応について	障害についての配慮・支援について学ぶ	多様な家族への支援	ひとり親家庭について
10	多様化する家族とその背景	虐待が疑われる家庭への理解と支援	障害児を持つ家庭	障がい者を持つ子どもを育てる家庭への理解と支援
11	心の問題が見られる家庭への理解と支援	障害のある子どもを育てる家庭への支援	虐待について	虐待の課題と現状
12	ひとり親家庭について	虐待が疑われる家庭への理解と支援	児童虐待の現状と課題	障害児家族の課題と支援
13	児童虐待について	児童虐待について	児童虐待とその裏側について	虐待を疑われる家族への理解と援助
14	ひとり親家庭の子ども・家庭への理解と支援	障害を持つ子どもを育てる家庭への理解と支援	ひとり親家庭に対する支援	虐待が疑われる家庭への理解・支援

15	虐待とその背景	増え続ける児童虐待	医療的ケア児について	児童虐待の現状と支援
16	虐待が疑われる家庭の理解と支援	虐待が疑われる家庭への理解支援	虐待について	児童虐待について
17	虐待が疑われる家庭への理解と支援	障害を持つ子どもを育てる家庭への理解と支援	虐待について	虐待が疑われる家庭への理解と支援
18	医療的ケア児とその家族への理解と支援	虐待が疑われる家庭への理解支援	子どものLGBTQ	虐待が疑われる家庭への理解と支援
19	虐待が疑われる家庭の理解と支援	ひとり親家庭の子ども・家庭への理解と支援	虐待の社会状況	多様な家族への理解と援助
20	子ども虐待の現状	虐待の解決に向けて	ヤングケアラーについて	発達障害のADHDについて
21	これからの日本の児童虐待の予防		心の病気を理解する	ひとり親家庭
22	児童虐待について		メディアから学ぶ精神障害—エヴァンゲリオンの心理学	ひとり親家庭の子ども・家庭への理解と支援
23	ひとり親家庭の子ども・家庭への理解と支援		障害児保育について	虐待と対応について
24	児童虐待について		ひとり親家庭を支えるため	虐待を防ぐには

			に	
25	ひとり親家庭の子ども・家庭への理解と支援			
26	心の問題が見られる家庭への理解と支援			
27	障害を持つ子どもを育てる家庭への理解と支援について			
28	虐待が疑われる親子の理解			
29	障害をもつ子どもについて			
30	医療的ケア児の支援について			
31	虐待が疑われる家庭への理解と支援			
32	医療的ケア児の支援について			
33	虐待が疑われる家庭への理解と支援			